

# 校内研修計画

八代市立郡築小学校

## 1 研究主題について

### (1) 研究主題

#### 「自ら学ぶ子供」の育成

～生徒指導の4機能を生かした授業づくりによる、自己教育力の高まりを通して～

### (2) 研究主題について

#### ①学校教育目標から

今年度の本校の学校教育目標は、「自ら学ぶ子供の育成～自己教育力を身に付け、主体的・協働的に行動する郡築っ子～」である。「自ら学ぶ子供」とは、急速に変化する社会の中を行く抜くために、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく子供のことである。

このような前向きな気持ちを醸成するためには、自己有用感などの自分に対する肯定的な感情を育むことが必要である。「みんなの役に立っている」「みんなに認められている」「ありのままの自分でよい」という感情は、子供の「もっと伸びたい」「できるようになりたい」という気持ちへつながっていく。自己有用感は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、など相手の存在なしでは生まれてこない感情だといわれている。一日の大半を占める授業のなかで、「友達の役に立ててうれしい」「友達に喜んでもらえた」「自分の話をよく聞いてもらえた、受け入れてもらえた」という経験を一人一人に積ませ、学級のつながりをつくり、一人一人が伸びる学習集団へと集団の質を高めていく。このようなつながりのある集団では、より深く聞き合い、より深く語り合うことができ、学びが深まっていくと考える。さらに、授業の中で児童同士のつながりが形成され、そのつながりによって授業での学びの質が高まっていくといった、よいサイクルを生み出していきたい。互いの存在を認め、互いの存在に学び合いで集団の中で、子供は安心して自己を高めたいという感情をもつようになると考える。

また、このような学び合う集団は、普段の教育活動の中で少しずつ育まれていくものである。普段の生活の中で、子供たちが生き生きと自らの目標に向かって伸びていくことができるよう積極的生徒指導（問題行動が起きたときではない普段の生活の中での生徒指導）の考え方で教育活動を行っていくことが重要である。そのための考え方方が生徒指導の4機能である。令和4年12月に改訂された生徒指導提要では、『生徒指導の実践上の視点』として①「自己存在感の感受」②「共感的な人間関係の育成」③「自己決定の場の提供」④「安全・安心な風土の醸成」の4つが示されている。これら4つの視点を意識した授業づくりを行い、さらによりよい方法を検証していくことで、子供たちは、安心して学び合い、伸びていき、引いては、子供の自己教育力の向上につながると考える。

#### ②児童の実態から

本校児童は、全体として明るく素直な児童が多く、授業においても、一生懸命学習に取り組む姿が見られる。昨年度の取組では、自己肯定感の向上につながる授業づくり及び学級づくりについて、成果と課題を共有することができた。また、マス計算などの反復練習、ICTを活用した基礎・基本の徹底を継続した。

資料①・②の令和6年度熊本県学力・学習状況調査（現3年生は、八代市学力・学習状況調査を実施）の結果を見ると、学年差が見られる結果となった。現3年生においては、両教科とも殆どの領域・観点において、平均を上回る結果となった。現4年生においては、県平均よりも下回る観点・領域があるものの、昨年度の八代市学力・学習状況調査よりも大きく上昇する結果となった。今年度も更なる向上に向けての取組が必要である。現5年生・6年生においては、国語において、県平均よりも下回る結果となった。特に、「書くこと」・「主体的に学習に取り組

む態度」が県平均を下回っており、自分の考えを進んで表現することに課題が見られた。また、「我が国の言語文化に関する事項」については、県平均よりも10ポイント以上下回っている。算数においては、「活用」・「知識・技能」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点において、県平均を下回る結果となった。授業において、基礎的な知識技能の徹底を図り、それを基に自分の考えを表現する学習を積み重ねていく必要があると考える。さらに、授業においては、生徒指導の4機能を生かした（教師の働きかけによる）授業改善に取り組むことで、児童が自ら学ぶ力を育てることが重要であるという結論に至った。

資料③を見ると、i-check の自己肯定感を測定する項目において、昨年度の結果と比べて向上が見られ、全国平均よりも高い項目が増えた。一方で現5年生においては、全国平均よりも低い項目が多く、学年差が見られる結果となった。自ら学ぶ子供の育成に向けて、自己肯定感の向上に向けた授業改善が引き続き必要である。また、ここでも生徒指導の4機能を生かした（教師の働きかけによる）授業改善を行い、自ら課題に取り組み、安心して学び合うことができるようになることが大切である。

これらの研究の方向性や児童の実態を踏まえ、昨年度の研究の方向性も維持しつつ、児童が授業を通して、自ら学ぶ力を育て、確かな学力を身に付けるように、そして自己教育力の向上につながるように、研究の仮説及び視点を考察し直し、本年度新たに設定し直した。

資料① 県学力・学習状況調査結果より（国語）

※現3年は、八代市平均との比較。

国語	総合	基礎	活用	言語の特徴や使い方に 関する事項	情報の扱い に関する事項	我が国の言 語文化に関 する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	知識・ 技能	思考・ 判断・ 表現	主体的に学 習に取り組 む態度
現3年	○	○	◎	○	○	—	◎	◎	○	○	○	◎
現4年	○	○	○	▽	▽	—	▽	○	○	▽	○	○
現5年	▽	▽	○	▽	○	▽	○	▽	○	▽	▽	▽
現6年	▽	○	▽	▽	○	▼	○	▽	○	▽	○	▽

○:県平均を上回った ◎:県平均を10ポイント以上上回った ▽:県平均を下回った ▼:県平均を10ポイント以下下回った —:測定不能

資料② 県学力・学習状況調査結果より（算数）

※現3年は、八代市平均との比較。

算数	総合	基礎	活用	数と計算	図形	変化と関係	データの 活用	測定	知識・技 能	思考・ 判断・ 表現	主体的に学 習に取り組 む態度
現3年	○	○	◎	○	—	—	◎	◎	○	◎	◎
現4年	○	○	▽	○	▽	—	▽	○	○	○	○
現5年	▽	○	▽	○	▽	○	▽	—	○	▽	▽
現6年	○	○	▽	○	▽	▽	○	—	○	▽	▽

○:県平均を上回った ◎:県平均を10ポイント以上上回った ▽:県平均を下回った ▼:県平均を10ポイント以下下回った —:測定不能

資料③ 昨年12月実施 i-check の結果（自己肯定感を測定する質問項目とその結果 全国平均との比較）

質問項目	現4年	現5年	現6年
自分にはいいところがあると思いますか。	+0.3	-0.5	+0.2
勉強やスポーツ、習いごと、趣味などで、自分なりに自信をもっていることがありますか。	+0.1	-0.2	+0.2
自分なりに努力したことがうまくいってうれしかったことがありますか。	+0.2	-0.3	-0.3
学校での日々の授業や活動の中で、自分は人間として成長したな、少し大人	+0.5	-0.6	+0.1

になれたな、と感じことがありますか。			
勉強やスポーツ、習い事、趣味などで、頑張っていることがありますか。	± 0	/	+ 0. 2
あなたは、ものごとを最後まであきらめずにやり抜く方ですか。	+ 0. 2	- 0. 3	+ 0. 2
あなたは、物事を行うとき、次の何をした方がいいか、自分で考えて行動していますか。	+ 0. 4	- 0. 2	+ 0. 2
夢中になった、勉強が面白いと思った、やる気が出た、という記憶に残っている授業がありますか。	+ 0. 3	+ 0. 1	+ 0. 1
友だちの意見を聞いて新しいことに気づいたり、自分の考えが深められたりして、勉強って面白いなと思うことがありますか。	+ 0. 5	- 0. 7	- 0. 2
学校生活の中で、クラスのみんなが、あなたに注目してくれることがありますか。	+ 0. 5	+ 0. 4	+ 0. 2
あなたの発言は、クラスのみんなを動かす力があると思いますか。	/	/	+ 0. 2
学校の授業やクラスの役割などで、自分は先生から期待されているんだな、友だちからたよりにされているんだなと感じことがありますか。	+ 0. 5	- 0. 3	+ 0. 2

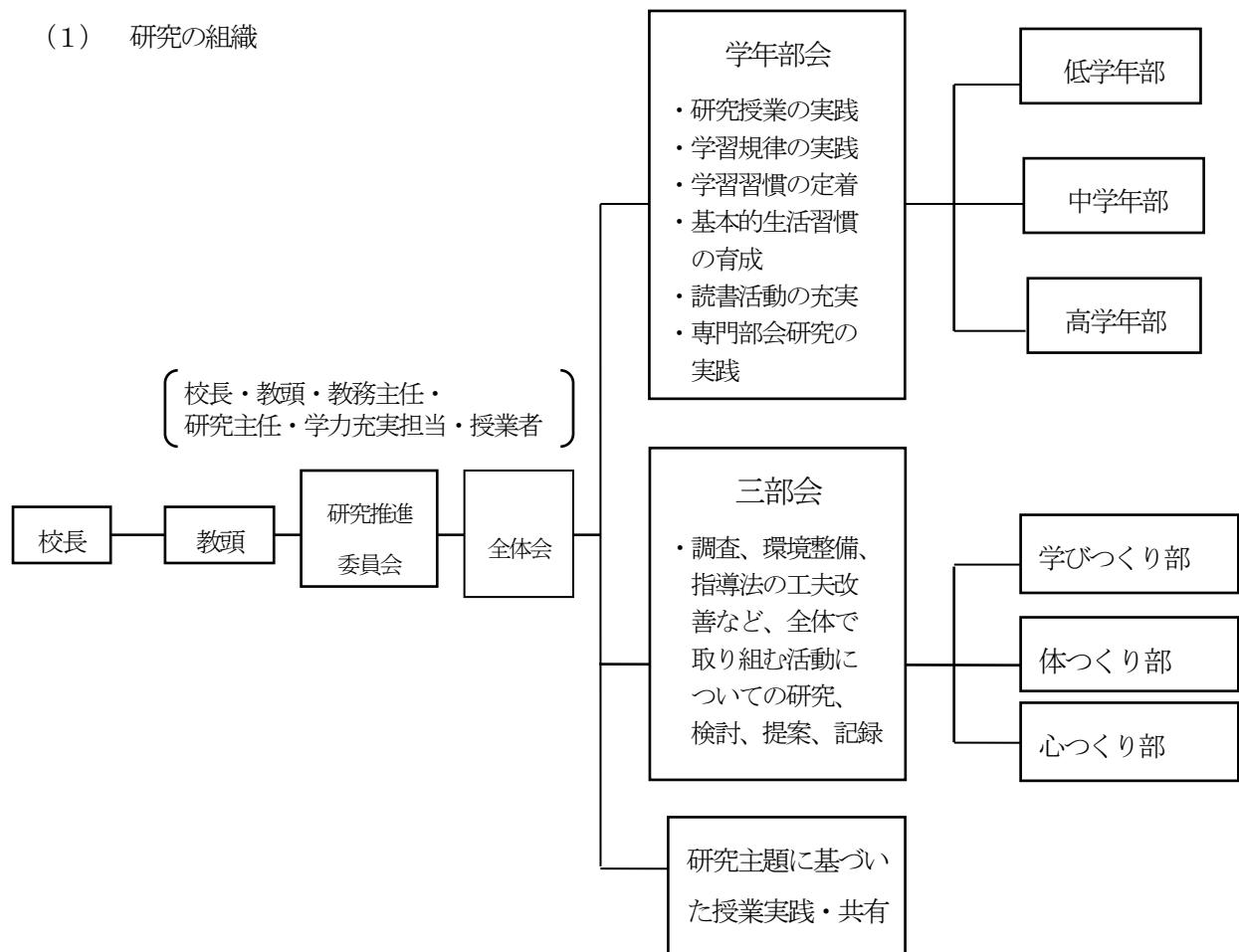
### 3 研究の仮説・研究の視点・研究の検証方法について

仮説	仮説 「自ら学ぶ子供の育成につながる授業づくり」
	生徒指導の4機能を生かした授業における教師の働きかけを日常的に行えば、子供は互いの考えに学び、互いの存在を尊重しながら共に伸びていくであろう。また、共に伸びる学習集団の中で、子供は安心し、自分の目標をもって学ぶようになり、子供の自己教育力が高まり、自ら学ぶ子供の育成につながるであろう。
研究の視点	<p><b>①子供が学ぶ意欲をもつ「課題設定」の工夫</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○振り返りをもとにした、前時とのつながりのある課題設定。</li> <li>○子供の「なぜ?」「やってみたい」を引き出す課題設定。</li> <li>○子供の既習事項や経験、考えを基にした課題設定。（「前時と違う点は?」「どこが新しい?」と問い合わせから生まれる課題設定）</li> </ul> <p><b>②子供が学びを深める「学び合い」の工夫</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○子供をつなぐ発問、問い合わせ（学び合いの必要性を引き出す、教師のファシリテート）。</li> <li>○児童全員が意思表示できるための手立て（選択形式にする、焦点化する発問など）</li> <li>○学び合うための学習形態（ペア・グループ・自由交流）の工夫。</li> <li>○相互評価の場面（互いに認め合う場面）の設定（昨年度の取組の継続）</li> </ul> <p><b>③子供が今後の学びに生かす「振り返り」の工夫</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「まとめ」：「学習課題」に対する知識・技能面での内容</li> <li>「振り返り」：「めあて」に対する自分の学び方を客観的に見たもの <b>（振り返りの視点）</b></li> <li>・自己の変容（できた点・難しかった点）</li> <li>・これまで学習したことから使えたこと</li> <li>・他者からの学び</li> <li>・新たに疑問に思ったこと</li> </ul>
検証方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究授業（大研）による授業の検証</li> <li>○全国学力・学習状況調査</li> <li>○自己教育力に関するアンケート（児童・職員対象に毎学期末に実施）</li> <li>○児童アンケート（i-Check）による変容の把握</li> <li>○全職員による公開授業の実施</li> <li>○県学力調査（経年変化）</li> </ul>

共通 実践	○「学習課題」・「めあて」・「まとめ」・「振り返り」カードの統一
	○ 学習課題・めあての設定、まとめ・振り返りの確実な実施
	○ 学習用具を揃える
	○ 学習集会で示した規律を基に、各学級で統一して指導を行う
	○ 学習内容を確実に定着させるための家庭学習の習慣化（見取りの徹底）
	○ 算数の授業の初めにマス計算の実施
	○ 学力充実タイムの実施
	○ 朝自習に暗唱を行う。（学び部会で月ごとの暗唱内容を決め、朝自習に暗唱をする。）
	○ タイピング技能の向上に向けて、毎週木曜日にタイピング練習を行う
	○ 係活動（低学年は当番活動）を各学級で行う

### 3 研究の実際

#### (1) 研究の組織



#### (2) 研究への参画

- ア 研究授業（大研）は、全3回行う。
- イ 研究授業の教科は限定せず、授業者の判断で決めてよいものとする。
- ウ 研究授業の事後研の運営は、学年部を基本として行う。
- エ 授業を担当する全職員において、前期（6月～9月）に1回、後期（10月～2月）に1回、全職員で授業公開を行う。また、年1回、授業研・公開授業に向けて構想案（細案）を作成する。（細案作成は、A ブロック授業研も1回にカウントする。）可能な限り参観する。